

# ひとを育てる活動

## SCM 創立 58 回記念レムルナイ・フェスティバルに寄せて

— 近い将来の私たちの SCMSI 支援の提言 —

今年も恒例の SCM 創立記念祭 (9/17-19) が開催され、ハイスクール生のマーチングバンドの行進で始まり、小学生からカレッジ生による伝統のチボリダンス (写真) 等の各種パフォーマンスが行なわれました。



当団体が JOFPA から SCMSI 支援を引き継いだ 2013 年度以降、レムルナイの案内と協力依頼も私たち HANDS のもとに届くようになりました。しかし、教育支援の一環として会員に協力をお願いしているクリスマスプレゼントに対して、レムルナイ対応はお祝いのメールメッセージ送付だけでした。

しかし、2020 年 1 月でチボリ支援開始 40 年になるのを機会に、今後の支援の形を検討する中で、創立記念祭レムルナイへの参加 (寄付) は、SCM と日本のパートナー関係を形に残す上で意味があるとして、予備費から寄付させていただきました。

レムルナイは、58 年前、1961 年にチボリのマホーク首長の要請を受けて、カトリック宣教師がサンタクルスミッション / SCM を設立、教育支援等の人道支援開始を記念するものです。

公立校が増えた今、SCMSI のレイクセブ町の教育に占める比重は減りましたが、チボリ民族の伝統文化継承を創立精神とし、「民族文化」が正課に入っている私学として、その存在意義は大きいものがあります。また、SCM の 58 年の歴史の中で、日本の市民の関わりはその長さだけでなく、SCM 校数 56 校というピーク時 1990 年代初めには、運営費の 8 割程度支えていたその貢献度は非常に大きいものがあります。

一方で、ハイスクール教育に対する政府補助金や授業料収入が増えて、SCM 学校法人運営における日本の資金面の貢献度は、2019 年度は 4% (推定) に減りました。私たちの定期支援がなくても、SCMSI 校の運営に支障は出ない数字です。

9 月に開催の理事会では、SCM 学校法人 (SCMSI) を通じてのチボリ教育支援の今後の在り方についても意見交換をしました。

レムルナイ、クリスマス、そして卒業期の学校備品寄付などの SCM とのパートナー関係維持に役立つ支援、また、個々の子ども支援については、現金収入が増えても余力のない家庭のカレッジ生奨学金拡充がよいという意見などが出ました。一方で、右欄でも触れる政府奨学金政策で、SCMSI カレッジ生 8 割程度がその恩恵を受けていることもわかりました。

今後は新設コースの学生など、政府奨学金対象外の学生に届くきめ細かい支援が必要と考えています。

## 医療技術者・国家試験に合格!

— あしなが奨学生ジェイク —

最終学年 4 年生の時に、あしなが奨学金で支援したジェイク (ビラーン民族) から、9 月半ばに PFP 経由で、Medical Technologist (医療技術者) の国家試験に合格したという報告がありました。他の奨学生同様、初挑戦に限る国家試験準備コース経費を支援したもので、6 月から地元とマニラの予備校に通い受験準備を進めていました。今や医師の診断には、医療技師が提供する各種データが不可欠です。今回その専門家が、私たちの先住民民族対象の奨学金で誕生しました。嬉しいニュースです。

## 政府奨学金とあしなが奨学金

今年度ただ一人のあしなが奨学生ロサリンが、1 年前から政府奨学金も受けていることが分かりました。

スルタンクダラト大学を 2 年前に卒業したブラクール出身サルニも、2 年生から町の奨学金を受けるようになり、あしなが奨学金は 500 円減額し、その分をブラクール小の給食費に回しました。

ロサリンについては、学生アパートの家賃など、政府奨学金で不足する分の申告に基づいて、今後のあしなが奨学金支給額を決める予定です。

ドゥテルテ政権下で拡充されたという政府奨学金、より多くの先住民の大学進学をかなえるものとして、今後も適正な運用に期待するとともに、私たちはその恩恵に浴さないケースへの対応に努めたいと思います。

## 辺境地域の初等教育を支えるナブル小・写真報告

— 8 年前の校舎建設支援の ICECK に感謝 —

鎌ヶ谷市の市民団体 ICECK の校舎建設支援により、2011 年 6 月に開校したナブル小学校の写真報告が届きました。ICECK の皆さんには、その後も卒業記念品贈呈など、引き続き子どもたちの成長を見守っていただいています。

児童数 500 人余と CMIP 運営 4 校で最大規模になったナブル小に対して、私たちは給食支援を継続しています。最辺境にあるこの学校は、カレッジ奨学金で育った新卒教師の赴任地です。

近隣にまだ公立学校がないため、今後もビラーンの初等教育の拠点として、住民たちはその存続に期待し、各種修繕などの労力提供を通じて協力しています。



1 年生の給食風景 (左) と、全校児童の朝礼